2006 MARCH

松本EXゼミ 永山活性化イベント開催
～青い空は青いままで、子供たちに伝えたい～

“ゼミ中心大学”を掲げる多摩大学には一つのプロジェクトを始めから終わりまで企画運営するEXゼミが数多く開講されている。そんな中、「多摩地域を元気にしたい!!」という“志”を持った学生達と松本祐一先生(多摩大学総合研究所助教授)がEXゼミ『永山団地探検隊』を立ち上げた。

地元住民とのヒアリングや、フィールドワークを通して、高齢化の進む多摩大学地元の永山・諏訪団地をどう元気にすることができるのかを検討し、『永山団地探検隊』を結成した。そして、永山・諏訪団地を舞台にした、地域の宝探しイベント「団地遊道楽 (だんちあそびどうらく) In 永山・諏訪」を2006年3月25日(土)に開催することになった。このイベントは近隣住民や学生が数人でチームを組み、永山・諏訪の公園や商店に設定したチェックポイントをまわりながら、チームごとに与えられたテーマ(「街の休息場所」「春」)で、地域の宝をさがして、それを地図に書き込み、写真をとる。最終的には、全チームの地図を集めて、まとめることで、新しい永山・諏訪の地図を作成することになる。地元のよさを再発見してもらい、団地外からも人を集め、永山・諏訪団地への住み替え促進及びコミュニティの再生・活性化を目指す。

イベントを開催するにあたり、多摩大学のEXゼミ生の他に、スタッフとして他大学の学生もボランティアとして参加してもらう。公民館や地元活性化の活動をしているNPO団体にも協賛してもらうなど多摩大学の授業の枠を超えたプロジェクトとなっている。

「青い空は青いままで、子供たちに伝えたい!」という松本先生、ゼミ生達の熱き“志”が一つの形となり、これからの多摩地域の発展に貢献していくだろう。

永山団地探検ホームページ：
http://www.sociopower.com/extop.html

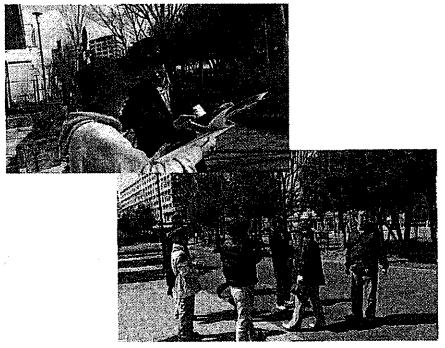
大学近くの公民館で開かれたイベント説明会の様子

2006 April

団地遊道楽 In 永山・諏訪
松本EXゼミ地元団地を活性化

2006年3月25日(土)に松本EXゼミ主宰の「団地遊道楽 (だんちあそびどうらく) In 永山・諏訪」が開催された。このイベントは地元住民とのヒアリングや、フィールドワークを通して、高齢化の進む多摩大学地元の永山・諏訪団地をどう元気にすることができるのかを検討してゼミ生主体で企画・運営したもの。当日は40名以上の参加があり、地元テレビ局が取材に来るなど多くの注目を集めた。イベントではフィールドワークの案内役も務めた萩原勇太君(3年生)に話を聞いた。

「今回のイベントでは古くから多摩に住んでいる人、最近引っ越してきた人、お年寄りの方からお子さんまで幅広い参加がありました。そんな人たちのコミュニケーションも今回のイベントの目的でした。フィールドワークでは植物に詳しい方が率先して団地内の植物を説明してくださり、新しい発見がありました。本ゼミである北矢ゼミではソシオビジネスについて研究しています。今回、役所の方や地元住民の方など様々な人にお話を聞くことができ、この経験は今後の研究の為にも大変貴重なものとなったと思います。」



参加者に説明する萩原君(上)フィールドワークの様子(下)

宮崎アニメ活用 まちづくり議論

多摩の商店街

多摩市の風景をモデルにし、宮崎駿さんがプロデュースしたアニメ映画「耳をすませば」をまちおこしに活用しようと、同市の「桜ケ丘商店会連合会」（松本亙章会長）が2日、「耳をすませばシンポジウム」を開いた。出席者からは「キャラクターの銅像作製やグッズ開発を」と、様々なアイデアが飛び出した。

「耳をすませば」は95年、スタジオジブリが制作。ニュータウンや聖蹟桜ケ丘駅周辺に似た風景が登場することから、昨年7月、多摩大の学生が同商店会と協力し、上映10周年を記念する無料上映会などを企画した。

今回のシンポは、映画活用の「第2章」。「耳をすませばで町おこしは可能か?」と題し、多摩大の大川新人講師をコーディネーターに、松本会長、ジブリ公認サイト管理人の毛利康秀さん、昨年の上映会を企画した鴨川美紀さんらがパネリストとして出席した。

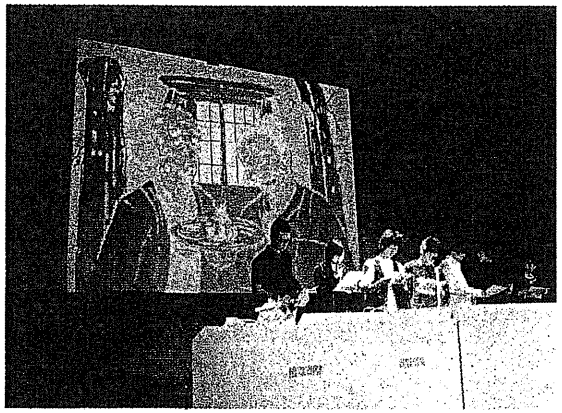
各商店による「一店一品」のグッズ開発、弁当など食品の再現、キャラクターの花火の打ち上げ、モニュメント作製のほか、映画に登場する丘の「開放」など、具体的なアイデアが相次いだ。

第1676号 アサヒタウンズ 2006年4月13日 木曜日 10

大学生がつくる
若者のページ

多摩大学(上)

(多摩市)



昨年7月に行われた最終プレゼンテーション

私には夢があります。「人々が精神の価値を認めて、心の底から理想というものを語れる時代にする」ということです。しかし高校卒業後の私には、それが具体的に何なのか、まだ気づいていませんでした。

高校を卒業した年の夏、アメリカの語学学校に留学しました。行き先は周りに牧場しかないテネシー。死に物狂いで英語を勉強しました。半年後、より高いレベルで学ぶため、ニューヨークの学校に転校しました。そこで私は、日本人が日本を誇らず、日本を恥じることに何とも思っていないことに衝撃を受けました。他国の人々と会話をすると、みんな故国について目を輝かせながら語りかけてきます。私は日本のことをもっと知り、良いところにたくさん気づかなければならないと痛感しました。そのためにはアメリカで学ぶより、日本で4年間しっかりと学ぶ方が、将来、大きな財産になるはずだ、そう確信して帰国しました。

入試を控えたころ、1冊の本に出会いました。「中谷巌の『プロになるならこれをやれ！』」(日本経済新聞社刊)です。自国を誇れない人が国際社会で尊敬されるはずがないと書いてありました。またこの本で、中谷さんが学長を務める多摩大学で、「自己発見」という講義を行っていることを知り、中谷さんの下で学びたいと、多摩大学に進学しました。

人間の多様さに気づく

「自己発見」講義通じ大きな喜び

「自己発見」は1年生必修の「気づき」のための授業です。前期半年間をかけて様々な側面から気づきを促し、自分という存在や夢を発見してもらうのです。

私は人間の多様さに気づかされました。Aさんはリーダーとして責任ある行動をとる。B君は物静かだけれど調査は細かくきっちりやる。Cさんはタイムマネジメントがうまい。私はそんなばらばらの集団をフォローする。それぞれの役割がはっきりし、一つの目標を見据えてまとまると、大きな力となります。私たちのチームは、ウオールアートという壁に絵を描く活動が街を活性化させることに着目しました。しかし大学の壁に絵を書くことは難しく、縦1㍍、横2㍍のはり絵を作成しました。それを壁に飾り、絵のあることで学生はどのように感じるかを調査しました。最終プレゼンテーション大会で私たちは優勝しました。

後期は、気づきをさらに深めたいという学生たちが学長と対話する「自己発見Ⅱ」が開講されました。ある時は「日本は民主主義国家であるか」というテーマで、約1カ月かけて議論をしました。

私は「自己発見Ⅱ」受講の傍ら、「自己発見Ⅰを考える会」を発足させ、学生から見たよりよい「自己発見Ⅰ」を模索しました。

次年度はティーチングアシスタント(TA)として「自己発見」に参加しました。裏方に徹し、直接1年生とかかわることはありませんでしたが、「自己発見聞録」という新聞を作ったり、中谷学長と学生、TAとの橋渡しをこなしました。

その年は後期に「自己発見Ⅱ」が開講されない代わりに、私は友人の安澤将太君と自主ゼミ「自己発見1.5」を開講しました。多い時には10人ほどが参加し、先生方や他大学生も交えてディスカッションを行いました。「繁栄の社会」のテーマで議論した時は、繁栄とは何か、豊かさとはどういうことかを真剣に意見交換しました。微力ではありますが、学長の意思を継いで、半年なんとかやり遂げられたことに、大きな喜びを覚えました。しかも最後に1年生から「このゼミをこれからも続けたい」と言われ、何よりもうれしかったです。

ティーチングアシスタント担当の杉田文章助教授(右)と話す

私はこの2年間でとても日本が好きになりました。尊敬する学長がいる。ともに高めあえる個性的な友人がいる。学生の成長に真剣に取り組み、サポートしてくれる先生がいる。何かに気づこうと必死に食らいついてくる後輩がいる。ですから、新1年生を迎えるのが楽しみでしょうがありません。

「経営情報学科」
3年 三宅 亮暢

地域の中で活動している学生さん、サークルや研究室などの紹介をしてみたい学生さん、一緒に記事を作ってみませんか。私がアドバイザーとしてコーディネートしますので、興味のある方、ぜひご連絡ください。(編集担当：小林英里 k-eri@ippo.tv)

若者のページのバックナンバーが、アスパラクラブ(aspara.asahi.com)の大学・就職コーナーの「カレッジライフ」で見られます。

16 2006年4月20日 木曜日 アサヒタウンズ 第1677号

大学生がつくる
若者のページ

多摩大学㊦
（多摩市）

高校卒業後、１年間のアメリカ留学で美術の持つ力に日本の、そして自分の輝ける将来を発見しました。

ニューヨークの街中には芸術が散りばめられていて、道を歩くだけでわくわくしました。駅にも道端にも彫刻がある。会社の入り口に見上げるほどの絵画が飾ってあって、誰でも触れられる。芸術が生活に溶け込むことで得られるこの幸せな気持ちを日本でも感じたいと考えるようになりました。

友達の芸術家に「日本では美術に経営の視点から取り組む人が少ない。アメリカでは美術ギャラリーの経営者にMBA（経営学修士号）を持っている人が多数いるのに」と言われ、「美術経営を学べる大学に行こう」と決心。望月照彦教授がアートマネジメントを教える経営情報学部経営情報学科を選びました。

ディベートをする望月ゼミの学生たち

２年生から望月先生のゼミに入りました。先生は21世紀は「ベンチャー（冒険）ビジネス」から「ミッション（志）ビジネス」になると予見し、ゼミは人間力、人生力、創業力の三つの力をつけることをベースにしています。また世界中で日本人ほどプレゼンテーションが下手な国民はいないと、毎月１回、プレゼンテーションやディベートを行います。

最大の課題は７月に行われた「古典を読み解く」で、古典を１冊取り上げ、１万2000字のレポートと10分間のプレゼンテーションをしました。他のゼミ生は一休宗純からカフカまでさまざまな本を取り上げました。私は青春をおう歌している今しか読めない古典はないか、青春をつづった作家はいないか、ということでランボーの詩集を取り上げ、「黎明（れいめい）」という詩を朗読しました。

自分の無限の可能性を信じて希望に向かって成長し続ける

アートマネジメント目指す

優勝者は先生の家の晩さん会に招待されます。私は優勝できませんでしたが、グループ対抗のディベートで優勝して、参加することができました。全員正装で、奥様の手料理でもてなされ、シャンパンで乾杯をする、まさにゴージャスなごほうびでした。先生がアドバイザーを務める勝沼のワインを味わいながら、先生夫妻の海外での思い出などを聞きました。

11月の学園祭では自主映画を上映しました。夏休みから撮り始めたものの、結局、上映前日まで撮影しました。場所は大学近辺の山中です。10月の山は寒く、シーンは夜。しかも夏の設定のため、みんな半袖短パン姿。唇が真っ青になるほどの寒さに震えながら撮影に打ち込みました。ある先輩は終始ガタガタ震えていて、上映会では観客が爆笑しました。

上映会には先生の友人である大手映画会社の方や映画プロデューサーもいらして、講評で私の演技をほめてくださる一幕もあり、自分の新たな可能性も発見できました。また一つの作品を作り出すことの大変さを身にしみて感じました。映像編集担当の先輩は４日間も徹夜し、監督と助監督はほぼ毎日撮影していました。創造の楽しさも学ぶことができました。

いずれも美術経営とは関係のない内容に見えますが、そんなことはありません。現代の美術経営に一番足りないもの。私は「芸術が人々を幸せにできるんだ。私は人々に幸せを与える仕事をしているんだ」という、ミッションに燃えた心だと考えます。

寒さにふるえて撮影を待つ

私には「人々が精神の価値を認めて、心の底から理想というものを語れる時代にする」という夢があります。「自己発見」の授業やゼミ活動は、その理想を成し遂げるためのたくさんの気づきを与えてくれます。大器にもひなの時代がある。自身の無限の可能性を素直に信じて、日々、希望に向かって成長し続けています。

「経営情報学科」
３年　三宅　亮暢

地域の中で活動している学生さん、サークルや研究室などの紹介をしてみたい学生さん、一緒に記事を作ってみませんか。私がアドバイザーとしてコーディネートしますので、興味のある方、ぜひご連絡ください。（編集担当：小林英里　k-eri@ippo.tv）

若者のページのバックナンバーが、アスパラクラブ（aspara.asahi.com）の大学・就職コーナーの「カレッジライフ」で見られます。

17 アサヒタウンズ （第三種郵便物認可） 2006年5月11日 木曜日

多摩南読者通信（府中・調布・狛江・多摩・稲城）

わが街の宝物は豊かな自然

世田谷区 学生・山内治樹（21）

私たち多摩大学のゼミ「永山団地探検隊！」に所属する学生は、団地の活性化を目指し、3月25日に「団地遊道楽」というイベントを開いた。これは、永山・諏訪地区でウオークラリーをしながら、自分が街の「宝物」だと思うものを探して地図に記入、より多くの「宝物」を見つけた人が優勝、というイベントだ。

当日は、子どもから80代まで40人が参加し、それぞれの「宝物」を探した。さらに、地元のエイサーサークルやプロマジシャンの多摩大生によるステージ、地元商店の出店などがあり、ちょっとしたお祭りのようだった。

「宝物」の多くは、春を感じる花や樹木だった。ニュータウンにはこんなに豊かな自然があったのかと、改めて驚いた。参加者からは「いつも見過ごしてしまうものを、今回は見つけることができた」という声もあった。宝探しを通して、多摩ニュータウンの魅力を再発見してもらおうと思っていた私たち主催者としてはうれしい限りだ。

宣伝活動や当日の運営は大変だったが、イベントを何とか成功させることができて一安心した。今後も定期的に開催できればと思っている。

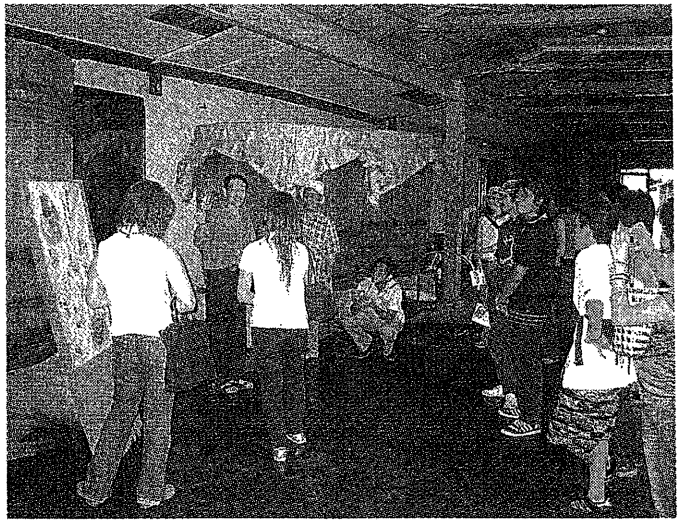
旬　刊　旅　行　新　聞

多摩大学の望月ゼミ

夏合宿の観光地募集

地域振興に学生の意見を

本紙でコラム「街のデッサン」を連載する多摩大学教授の望月照彦氏のゼミでは、夏合宿に訪れる観光地・施設を募集中。同ゼミで毎年続けられ、「現地を訪れた学生から、既存の旅行、宿泊業界にはない発想や視点を生かした提案や意見が聞ける」と、これまで受け入れた地域で好評だ。



昨年の夏合宿のようす。栃木市の味噌造り蔵で説明を受けた

望月ゼミでは、毎年観光地などを訪れて、観光振興につながるような意見や提案を行ってきた。入込み客数の低下で危機感を募らせる観光地や宿泊・観光施設が増えているなか、学生はこれからの観光業を支えていく大切な顧客だ。「その学生たちが今、観光に対してどんな考えを持っているのかを、生の声として聞けるのはとても貴重な体験と、視察に訪れた地域や施設でよく言われる」（望月氏）という。

今年の夏合宿は、関東近郊で、7月28・29日、もしくは29・30日の1泊2日を予定。望月氏とともに40―50人の学生が視察に訪れる。対象は関東近郊の自治体や観光関連団体、宿泊・観光施設などで、①観光地・施設として入込み客数の激減など、大きな課題を抱えている②既存の観光業界に縛られない考えや意見を欲している③40―50人の学生と地域の関係者とがディベートできる場所を提供してくれる④1泊2日の夏合宿なので、朝・夕食と寝床を学生料金（1万円以下）で提供してくれる――の4点が条件となる。当日の視察コースやガイドの有無については、学生と要相談。

昨年訪れた栃木県栃木市では、同市は昔、材木や味噌などを運ぶために水運が発達していたので、それをもう一度見直して産業遺産の「蔵」を活用した環境整備を行うべきなどを提案した。その提案の場には議員も出席しており、「市議会でもぜひ、提案したいのでまとめたものが欲しい」と言われたという。栃木市では、この提案を組み込んだまちづくりが今でも進められている。

問い合わせ＝本紙・編集部 ☎03(3834)2718 メールazuma@ryoko-net.co.jp。

多摩大学の新たな試み
「チーム・マイナス6%」始動！！

深刻な問題となっている地球温暖化。グローバルな問題として切実感の増している環境問題を解決するため、多摩大学の学生達が立ち上がった。浜田正幸助教授の EXゼミである。

2005年2月に発効された京都議定書を基に日本では温室効果ガス排出量を6%を削減することを目標とした。これを実現するための国民的プロジェクトが「チーム・マイナス6%（http://www.team-6.jp/）」である。EXゼミではまず大学に「チーム・マイナス6%」に加入することを提案し実行した。そして全学で様々な活動を行うアクションプランを作り、全学的な取り組みとして発展している。

浜田先生にEXゼミについて話を聞いた。

「消費心理という別の授業で『エコマーケティング』を取り上げたときに「チーム・マイナス6%」の活動を紹介しました。その時に学生からもっと勉強したいという意見が多く聞かれました。一方で私自身も地球市民の一人として温暖化ガス防止の活動をすべきだと感じていました。EXゼミでこの活動を扱おうと思ったのはホームゼミナール（2年生から4年生まで担当教員の元でそれぞれの専門分野を探求・追求していくゼミナール）ではメンバーやテーマが固定されてしまい、迅速に行動を起こすことが難しいのですが、EXゼミ（半期で1つのテーマについて問題解決する、より実践的なゼミ）では机上の理論だけではなく、実際にアクションが起こすことができますし、非常に機動的で深い議論ができるのです。一般の企業ではプロジェクトという形で組織に縛られずに横断的にメンバーを選んで活動をすることがあります。組織論的にも優れた問題解決型のゼミを学生時代に体験できるのはとてもユニークで他の大学にはない、まったく新しい試みだと思います。」

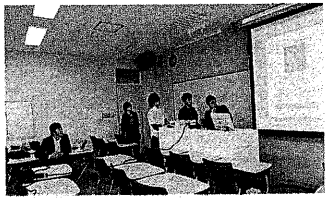
浜田正幸先生

産業界出身・現役の先生が多い多摩大学だからこそできる問題解決型ゼミ「EXゼミ」。続いて浜田先生の人柄に引かれてEXゼミに参加した陳俊亦君（3年生経営情報学科）に実際の活動について聞いた。

陳俊亦君

「ゼミのメンバーと話し合い、レジ袋をもらわないようにしようというポスターを自分たちで作って学内に掲示したり、ポスターやシールで節電・節水を大学全体に呼びかける活動をしています。計画や提言を考えることよりも実際に活動することの方が本当に難しいと感じました。でも社会経験豊富な浜田先生から色々なアドバイスをもらうことができて勉強になりましたし、とても楽しいです。ホームゼミナールの野田稔ゼミではホスピタリティのプロジェクトを立ち上げたいと思っています。今回のEXゼミでの活動が将来、役に立つと思っています。」

多摩大学では浜田先生のEXゼミの提案を受けて学内の温度設定の徹底、KTC運動を通じてのゴミ分別等を全学的な取り組みとして実践している。今後も多摩大学は「チーム・マイナス6%」のメンバーとして全学あげて積極的な活動を行っていく。


ゼミの様子　ポスターのデザインについて発表する

みんなで止めよう温暖化
チーム・マイナス6%
2006 JULY

讀賣新聞 （第三種郵便物認可）

多摩川花火大会 成功させよう

多摩大生ら支援の大輪

多摩市の多摩川河川敷で8月に開かれる「せいせき多摩川花火大会」を成功させようと、同市にキャンパスのある多摩大で学ぶ学生たちが、支援活動に取り組んでいる。大会の公式ホームページ（HP）を運営したり、アトラクションに和太鼓の演奏を企画したりと、率先して大会にかかわっている。

花火大会で演奏する和太鼓団体の代表者から話を聞くゼミ生たち

公式HP運営や和太鼓演奏企画

この学生たちは、同大講師の大川新人（おおかわしんと）さん(40)が指導するゼミ、その名も「せいせき多摩川花火大会を盛り上げよう！」（木村洋平代表）で学ぶ学生だ。

同大は、座学よりも実践を重視するためのカリキュラム改革の一環として、昨年度から、従来のホームゼミに加えてプロジェクトゼミを開設している。このゼミもプロジェクトゼミの一つで、「自分たちの住む多摩をもっとよく知り、地域のイベントを支えよう」と開設され、2、3年生7人が参加している。

学生たちは渉外、記録、広報の3チームに分かれ、毎週木曜日のゼミの時間を中心に活動。HPの運営のほか、ゼミの授業内容を紹介するブログの開設、地元の和太鼓団体「愛宕太鼓鼓友会」との出演交渉、花火製造会社の訪問記事のHPでの公開など、積極的に行動している。

同大経営情報学部3年の尾崎靖史さん(20)は「講義では得られないことが学べる。なかなか触れ合う機会の少ない市民とも交流できる」と満足げだ。

昨年も「映画でまちおこし」というプロジェクトゼミで、学生と一緒に多摩の活性化を模索した大川さんは、「学生も自らアイデアを出し、自主的に動いている。活動を通じて多くの人と知り合い、多摩が好きになってくれれば」と話している。

せいせき多摩川花火大会は8月10日午後7時半から、多摩市の一ノ宮公園周辺で開かれる。

『朝日新聞』朝刊 2006年7月12日 朝日新聞社発行

多摩

立川支局

和太鼓で花火盛り上げ

多摩大生ら多摩川河川敷の大会で企画

来月10日 開会前に地元演奏集団

多摩大（多摩市）の学生たちや多摩市民の要望で昨年復活した同市の花火大会を盛り上げようと、学生たちが、地元の和太鼓グループによる演奏会を企画している。

「祭りといえば太鼓。花火に負けない音を響かせ、景気をつけたい」と意気込んでいる。

同市の花火大会は、多摩商工会議所の主催で、86年から「多摩川関戸橋花火大会」として、多摩川の河川敷で開かれてきた。しかし、03年、増水した川の中州に花火師が取り残される事故があり、翌年、中止された。しかし、多摩大の学生有志が市議会に陳情するなど、再開を望む市民の要望が高まり、05年に「せいせき多摩川花火大会」として復活した。

同大経営情報学部の大川新人講師は今年4月、花火大会を盛り上げることを課題にしたゼミを計画。学生7人とアイデアを練った。お笑い芸人やバンドを呼ぶ案も検討されたが、和太鼓に落ち着いた。ゼミの木村洋平さん（3年）は「老若男女が楽しめるものにしたかった」と話す。

学生たちが交渉したのが「多摩市愛宕太鼓鼓友会」。77年に活動を始め、87年には、和太鼓奏者で有名な林英哲さんたちと一緒に国立劇場の舞台に立ったこともある。

今月初めには、代表の佐藤利実さん(65)がゼミに出席、学生たちに演奏への思いを語った。「気後れのようなものもありましたが、花火大会に出たいと思っていたのでうれしかった」と佐藤さん。

8月10日に予定されている花火大会では、午後7時半の開会前に、多摩川の土手にメンバー十数人が並び、「花火に負けないようにバチをたたく」（佐藤代表）という。

大川講師は「学生の力を使って地域を元気にするのがねらい」と話す。

練習に励む「多摩市愛宕太鼓鼓友会」のメンバー＝多摩市内で

花火大会の実行委員会も「若い人たちが手伝ってくれるのは助かる」。

実行委によると、今年は昨年並みの4600発を打ち上げる予定で、22万人以上の人出を見込んでいる。問い合わせは同市経済観光課（042・338・6830）へ。

2006 SEPTEMBER

体験型環境教育プロジェクトに多摩大生が大活躍

2006年8月11日金曜日。東京都昭島市にある多摩川の河川敷に約70人の小学生が集まった。3つのグループに分かれ、実際に川に入り「川とゴミ」「川と生態系」「水の循環」について勉強した。このイベントの企画から運営を行っているのは多摩地域の大学生達である。その中心的なメンバーを務めたのは多摩大学のサークル「エコノミカ」の学生達である。

このイベントは社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩主催の「第3回体験型環境教育プロジェクト」で、多摩地域の大学生達が小学生の為の環境教育のクイズやアクティビティを自分たちで企画・運営したもの。11日の午前中には国営昭和記念公園でクイズやゲームを通して環境についての知識を深め、午後は実際に多摩川に入って環境問題を実体験した。12日には東京ガス、東京電力、キリンビールの3社による実社会の環境保護活動の説明を受け、最後には自分たちの考えを発表した。

3つのコースのリーダーを務めた多摩大生3人に話を聞いた。「エコノミカの友人から誘われて、他の大学の学生と活動をする機会があるということに魅力を感じて参加しました。リーダーとしてスケジューリングやミーティングマネジメントが難しかった。授業にも大分支障がでましたが、同じ目的をもった仲間達と出会えたことは良い経験になりました。（山口雄士君 経営情報学部2年生）」「以前から環境教育には興味を持っていて小学生のうちからもっと環境に接してもらいたいと思っていました。最初のうちは色々な大学から集まったせいもあってモチベーションがばらばらでしたが、少しずつまとまっていきました。当日は子供たちも楽しそうで、最後に手紙をもらったことに感動しました。（ト部裕義君 経営情報学部2年生）」「ボランティア活動に興味がありました。リーダーに立候補したのはプロジェクト運営や企画に興味あったからです。経営情報学で学んだことが発揮できたし、それぞれの大学の特色も引き出すことができて良いプロジェクトだったと思います。（西加幸生君 経営情報学部2年生）」

経営情報学部で学んだ事を最大限に発揮した彼らは今後は多摩大学主催のイベントを開催したいと熱く語ってくれた。

実際に多摩川に入って環境について考える

地域活性化のインキュベーターiketama.comを多摩大生が運営

多摩大生が中心となった「iketama.com」プロジェクトが多方面から注目を集めている。

「iketama.com」とはウェブサイトにて、多摩ニュータウン地域の事業所・商店のCM、イベント情報、地域ニュース等の映像を配信することによって地域事業を支援、活性化させる事を目的としたプロジェクトである。

プロジェクトの中心的役割を担っている高橋玲於奈君（経営情報学部4年生）にプロジェクトについて話を聞いた。「このプロジェクトは私がチャレンジ(AO)入試で入学する時にテーマとして選んだ"個人向け投稿ニュース映像配信サービス"を具現化したものです。このプロジェクトは多摩大学の松本先生からの紹介で他４人の多摩大生、多摩美術大生、青年会議所の方、有限会社tama858の都田さんと多摩美助教授で多摩大大学院生でもある吉橋さんと立ち上げたものです。私はシステム及びサイト構築を担当しています。営業、取材なども他の多摩大生メンバーがやっています。コンセプトをまとめる際に多摩大生の経営的な価値観と多摩美術大生の美的な価値観が相反してしまいました。でも、お互いの意見をぶつけあったことによって、納得できるコンセプトを完成させることができました。私の将来の目標は起業し、パラダイムシフトを起こすことです。このプロジェクトが地域のメインメディアに発展できれば目標を達成できるかもしれません。」

地域活性化のインキュベーターとして活用が期待される「iketama.com」の今後に期待したい。

ホームページ：http://iketama.com/

iketama.comの取材の様子

『読売新聞』朝刊 2006年9月4日 読売新聞社発行

江南の活性化 学生が提言

多摩大のゼミ「食文化前面に」「都市と交流を」

多摩大学（東京都多摩市）の学生たちが3日、江南町の将来の地域活性化をテーマに、同町で研究発表会を開いた。〝企業家の卵〟からのユニークなまちづくりの提言に、町職員、町議、観光協会のメンバーらは熱心に耳を傾けていた。

ユニークなアイデアが披露された多摩大生による江南町活性化の発表会

発表を行った学生は同大経営情報学部の望月照彦教授(63)の地域経営学ゼミの2～4年生45人。同ゼミは十数年前から、地域に貢献する企業家育成を目指して、関東の自治体のまちづくり構想をテーマに、毎夏、研究を行っている。今回は、来年2月に熊谷市と合併する江南町を選んだ。

約1か月前から資料を精査。2日に同町を訪れて町内を視察し、住民との対話を行うなどフィールドワークを実施。3日は、前日の成果も合わせて、町内のホテルの研修棟で、5グループに分かれて提言を披露した。

それぞれのグループは、「町が文化、観光資源を生かし切れていない」「役場と住民の連携が不十分」などと問題点を指摘。まちづくり構想としては、豊かな自然を活用した「都市の子供たちの自然教育都市」、ブルーベリーやうどんといった食文化を前面に出したまちづくり、「ファームホリデー」など都市と農村との交流などを提言した。

審査員として招かれた10人の町関係者も、学生たちの新鮮な発想に感心していた。望月教授は「企業経営の学習も、現地で体感し、考えることが大切だ。学生たちのアイデアを、合併後の地域づくりに役立ててほしい」と話していた。

埼玉新聞

2006年(平成18年) 9月5日 火曜日 第22210号

官民連携で独自性を

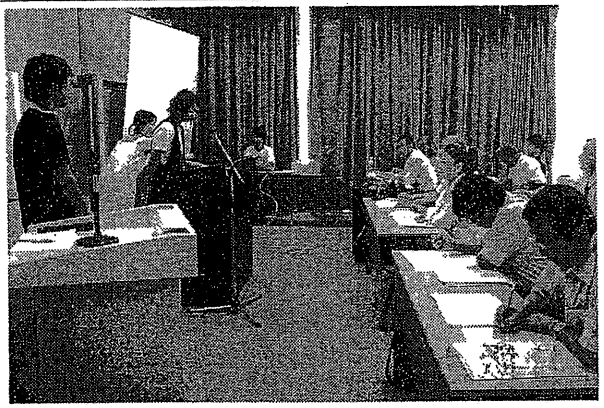
合併控え江南町 多摩大生がまちづくり提案

熊谷市との合併を来年二月に控えた江南町のまちづくりについて、地域産業経営学の立場から研究を進めてきた多摩大学（東京都多摩市）の学生グループが三日、同町小江川のホテル・ヘリテイジで、行政や商工会、観光協会の関係者を前に成果を発表、町おこしのアイデアを提案した。

望月照彦・同大経営情報学部教授のゼミ合宿の一環。ゼミ生は「合併後の同町が埋没することなく独自性を発揮するにはどうすればよいか」という問題意識で、データを分析したり、実際に現地に足を運んだりしてアイデアを練ったという。

二、三年生の五グループが発表。町に人を呼び込むためのアイデアとして、都会住まいの家族や小学生に農業体験をさせるファームホリデーなどの実施で農業を前面に押し出す▽うどんを名物として売り出し、食べ歩きのスタンプラリーを組み合わせる▽地区ごとに分散している小規模な祭りを統合し、四季折々のイベントとしてPRする―などが提案された。

いずれもカギになるのは行政と民間の連携。例えば、農業体験とホテルヘリテイジの温泉入浴をセットにしたり、熊谷市にキャンパスがある立正大学と共同でイベントを打ったりすることが重要という。審査にあたった新井豊子町議は「町民には考えつかないアイデアがあって参考になった。議会にも持ち帰り、今後のまちづくりに生かしたい」と話していた。



町経済課の職員、商工会や観光協会の役員が発表内容を審査し、総合得点で賞が贈られた―江南町小江川のホテル・ヘリテイジ

2006 OCTOBER

望月照彦ゼミが江南町活性化について提言

望月照彦ゼミが埼玉県江南町の活性化について提言を行ったことが多方面から注目を集めている。望月ゼミは地域に貢献する企業家育成を目指して、関東の自治体のまちづくり構想をテーマに毎夏、研究を行っている。昨年の栃木県栃木市への提言に続き、来年2月に熊谷市と合併することになっている江南町の活性化について2006年9月2日(土)・3日(日)の2日間、調査・提言を行った。

合宿には望月ゼミ2年生から4年生の約30名と多摩大学大学院OB3名が参加した。望月ゼミは学部と大学院が立体的にプロジェクトを進めている。今年のテーマは「熊谷市との合併で江南町が埋没することなく独自性を発揮するにはどうすれば良いか」というもの。1ヶ月前から町についての資料を集め、1日目には町役場の案内で住民からのヒアリングや江南町の様々な場所を視察してフィールドワークを行った。その後宿舎に戻り、各グループに分かれ、江南町活性化についてディスカッションを重ね、次の日の提言のためのプレゼンテーション資料作成が夜遅くまで続いた。2日目は、町内のホテル研修棟で、町会議員、観光協会、役場の方、そして望月教授の前で自分たちの提言についてプレゼンテーションを行った。「町が文化、観光資源を生かしきれていない。役場と住民の連携が不十分」といった問題提起からはじまり、そのための解決案をプレゼンテーションした。『都市住まいの家族や小学生に名物のブルーベリーなどの農業体験をさせる"ファームホリデー"の実施で農業をアピール』『うどんを名物として売り出し、食べ歩きのスタンプラリーを行う』といった様々な提言が行われた。発表後、高い評価を受けた提言は町議会にも実際に紹介される。

今回合宿運営の中心メンバーだった赤壁博之君（3年生）は今回の活動について「地方が元気がないというのは聞いていましたがフィールドワークを通じて実感しました。町のいいところを見つけそれを提言につなげるという一連の活動がとても勉強になりました。富山の実家でも同じように地元の良いところを見つけ、地域活性化のために何か役立てればと思っています。」と語った。

町議会、観光協会、ホテル関係者の前で緊張したプレゼンが進められた

野田稔ゼミ夏季合宿にゲスト講師多数参加

毎年恒例の野田稔ゼミ夏合宿が2006年9月18日(月)から22日(金)の間、伊豆高原で行われた。今回のゼミ合宿に参加したのは2年生から4年生のゼミ生約80名。野田ゼミの最大の特徴は自主ゼミである。合宿も例外ではなく、3年生が中心となって会場選びから合宿中のゼミ運営のプログラムまで行った。また、現役の経営コンサルタントである野田先生の知り合いで現役のビジネスパーソンの方が大勢参加するのも野田ゼミ合宿の特徴。今年も10名ものゲスト講師が参加し、講義や学生の発表に対する意見だけでなく、"人生について""働くこととは？"といった人生の先輩からのアドバイスをゼミ生に語った。

今回の合宿の前半は各学年で分かれ、2年生は4年生からの講義やディスカッションなど、3年生は輪読や自分の研究発表、4年生は卒論の中間発表を行った。また、3年生を中心に11月に開催される学園祭で出店する模擬店の運営のための、商品開発、収支計画などの具体的な検討を行った。野田ゼミの模擬店は実際の会社同様に企画運営され、毎年高い評価を受けている。また通常学年ごとに行われているゼミの垣根を越え、2年生から4年生合同でディスカッションも行われた。映画「八甲田山」を見てリーダーシップについてディスカッションするというもので2年生にとっては先輩たちの意見を聞く良い機会になったという。

初めて合宿に参加した2年ゼミ長の藤本亜希子さんは「とにかく楽しい合宿でした。普段のゼミより圧倒的に密度の濃い内容でゼミ生同士の絆が深まりました。他者の存在を受け入れ、メンバーのベクトルを合わせることによって生まれる力を実感できました。また、普段は別の時間帯で接点の少ない先輩方と親しく話せた事も良い経験となりました。」と充実したゼミ合宿について熱く語った。

合宿中の研究発表の様子

『旬刊　旅行新聞』 2006年10月1日 旅行新聞社発行

街のデッサン ㊻

ヒューマン・サンクチャリーへの挑戦

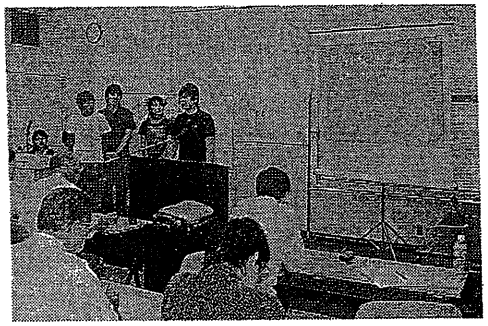
エッセイスト
望月 照彦

学生たちが江南町で提案

新井豊子町議員が驚き顔で発言した。「こんな体験は初めてです。若い皆さんの提案には感動しました。観光地域づくりのためにぜひ、できることから始めていきたいと思います」。

観光ビジネスモデルがプレゼンされたホテルの会議室は、まだ緊張感が張っている。埼玉県江南町、来年の2月には熊谷市に合併される。しかし、地域のアイデンティティや誇りは失いたくない。そして、人々を招き入れる観光地としても、大きな成果を挙げるためにとくに若い人たちの意見がほしい――。町の人々の情熱で、望月ゼミの合宿がこの夏、実現した。

江南町は、池袋から東武東上線で1時間を切る。9月の初旬、まだ厳しい太陽が照りつけるなか、ゼミ生を乗せた2台のバスが町の主だった場所を廻る。農家の主婦たちが始めた地域の農作物を使った地産地消のコミュニティレストラン、18世紀に造られたという豪族の館、踊る埴輪を出土した古墳、そして〝ハケ〟と呼ばれる里山と平地が交わる斜面林など。ゼミ生たちは、この地域の歴史や普段触れることのない豊穣な農業に感動しながら、一方で草ぼうぼうで手入れが届いていない古墳などの姿に憤慨しながらバスツアーを堪能した。初日は徹底的に地域を視察し、2日目は朝早くから提言のビジネスモデルをまとめる。2日間のギュッと凝縮した合宿だ。



ゼミ生たちの熱心なプレゼンに、地域への思いが溢れる

今回、地元のヘリテージリゾートという施設にお世話になった。ゼミ生たちが、町のためにあらん限りの知恵を絞ってくれるという条件で、杉田憲法社長が施設を格安で提供してくれたのだ。2日目の午後から、5班に分かれたチームが20分のプレゼンを行う。その審査員として町議員・役場の方々、観光協会の面々総勢10人が参加してくれた。「豊かな自然環境を生かした〝子供自然教育の町〟づくりが、私たちの主張」と緊張した面持ちの荒武者と名づけたメンバーが最初に発表した。

「農業こそが21世紀の主産業」と提案したのは〝イエスか農家〟という珍妙な名前のチーム。「UDONで町興し」や「ファームホリディで都会との交流」「蛍祭などの通年型祭り都市」など、5チームがすべて個性的な提案を行った。彼らの誰もが、この地域の自然と風土が持つ人間のための楽園を思い絵描いたに違いない。「ヒューマン・サンクチャリー江南」、私の頭に浮かんだ言葉だった。

振替00190－4－38126　第1227号

旬刊 旅行新聞
THE RYOKO SHIMBUN

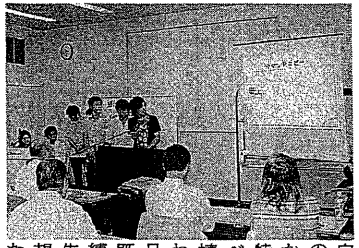
学生が地域振興でプレゼン

斬新な発想生かす

多摩大の望月ゼミ　埼玉県江南町の観光関係者と

地域活性化に、既存の旅行・宿泊業界にはない発想や視点を生かしてプレゼンテーション――。本紙でコラム「街のテッサン」を連載する多摩大学教授の望月照彦氏のゼミ学生約40人が9月2、3日の2日間、埼玉県江南町を視察。同町の観光担当者や観光関連団体の職員に向けて、活性化案を提案した。

実際のプレゼンでは、自然や祭りなどの伝統文化を生かしたものや、特産品のブルーベリーと「踊る埴輪」を組み合わせた新しい商品の開発など、既存の業界には縛られない、学生ならではの発想が飛び出した。



江南町は荒川の南に位置し、天然ホタルも生息するなど自然が豊富なところ。また、栗やブルーベリーなどの農業も盛んで、古墳や遺跡、神社などの文化財も多い。一方で、観光業に関して受け入れの経験が浅いのが現状で、2007年2月には隣町の熊谷市との合併が決まっていることから、地元関係者は「熊谷市の一部に埋もれてしまうのでは」という懸念を抱いている。

夏合宿1日目は、江南町の現状を視察。学生は5班に分かれて、重要文化財の「平山家住宅」やホタルの生息地、荒川河川敷などを散策して回った。

2日目は、午前中に企画内容を練り、午後から江南町の観光担当者などに向けてプレゼンテーションを行った。冒頭のあいさつで望月氏は「毎年、大学が地域に役に立つ学問をしようと、地域の人と一緒に地元の文化や産業をイベントにする事業を提案している」と夏合宿の主旨を説明し、「江南町は農業や伝統文化など豊富な観光素材があるが、それを生かしてきていない面もある。学生たちがどんな活性化策を打ち出すのか楽しみだ」と話した。

学生からは、「地元の子供たちに江南町の自然を活用した『秘密基地』をつくってもらう。その後、東京・池袋から電車で約1時間という立地条件を生かし、首都圏との小学生たちと交流させる林間学校を実施したらどうか」という提案が出た。

また、「江南町では地元から踊る埴輪が出土したこともあり『埴輪の里』を謳っているが、はにわだけではイメージが湧きにくい」と指摘。「特産品であるブルーベリーをアイスクリームにして、はにわデザインのコーンで包んだ『はにわブルーベリーアイス』を開発してみてはどうか」などの意見も出された。

2006 DECEMBER

豊田ゼミ３チーム
関東10ゼミ討論会でコメンテーター賞を受賞

2006年11月18日（土）に関東10ゼミ討論会2006が法政大学スカイホールで開催され、豊田裕貴助教授ゼミの３チームがコメンテーター賞を受賞した。関東10ゼミ討論会とは関東圏の主要大学でマーケティングを専攻している12大学のゼミが集まりグループ別の研究を通して研究発表や討論をする場として開催されているもの。今年は9分野に分かれ、月に1回集まり、ディスカッションや研究発表を行ってきた。その最終発表会として行われたのが今回の討論会である。発表を評価するのは博報堂、花王、資生堂、サントリーといった企業で実際にマーケティングの第一線で活躍している専門家。44チームが参加した中、多摩大学の豊田ゼミが見事、飲料、美容、エンターテインメントAの分野で最優秀チームにおくられるコメンテーター賞を受賞した。

受賞した３チームの代表学生に話を聞いた。エンターテインメントAで『映画予告編と口コミの関係の研究』を発表した川幡麻衣子さん（3年生）「他の大学と一諸に活動をして色々な意見や考え方、分析方法があって、マーケティングの奥深さを再発見しました。発表について専門家の方から“チャレンジング”だね。と何度も評価していただいたことが印象に残っています。」飲料の分野で『飲料業界の消費者から見る態度・行動のロイヤリティと継続購買の関係性の研究』を発表した林あすかさん（3年生）「ヤクルトとサントリーで実際にマーケティングをしているコメンテーターの方から厳しい指摘やアドバイスをいただいた事がとてもためになりました。」 美容・健康の分野で『美容行動を動機付ける自己効力感に影響を及ぼす個人特性の研究』を発表した三宅早織さん（3年生）「多摩大学外でゼミの研究をすることで外に出て交流する楽しみを知りました。そしてそれが自信につながりました。」

受賞後の美容・健康分野の研究チーム

当日の発表内容はhttp://10zemi2006.client.jp/で公開中

2007 JANUARY

中川ゼミ「コンビニ経営ゲーム大会」開催

経営情報学部中川理ゼミが企画した「コンビニ経営ゲーム大会」が2007年12月16日(土)に多摩キャンパスで行われた。中川ゼミはマーケティング戦略を研究するゼミで当初はゼミ内の活動として経営戦略シミュレーションゲームを開発していた。今回の大会を企画した事についてゼミ長を務める相原由隆君（4年生 経営情報学科）はこう語る。「私たちのゼミは土曜日に開講しているので平日に他のゼミ生や1年生との接点がなかったのです。なんとか自分たちのやっていることや就職活動を通じて感じたことをみんなに伝えたくて企画しました。ゲーム性を重視してみんなが楽しめる仕上がりになっていますが、実際の仕事の場でも必要とされる限られた時間で戦略をたて、決定していく力をつけることができるシミュレーションになっています。」

当日参加したチームは18チーム。各チームがコンビニチェーンを経営する企業となり収益力を元に算出した企業価値で競う。午前中は3つの会場に分かれて予選を行い、上位6チームが決勝に進む。ゲームは市場となるマップ上にコンビニを出店する。各マスには売り上げが設定されていてマスに出店を行うと毎ターンごとに売り上げが入る。2×2マスや3×3マスといったエリアを一つのチームが支配すると売り上げが2倍、3倍になる集中出店効果や全部で10店舗以上出店するとコストが下がるスケールメリットを得ることができる。2チームが同マスに出店すると競争力の高いチームが支配店舗となる。この競争力を上げるためにはマネージャーを配置して自社の競争力を高める。このような対策を行うために各チームにはカードが配られ、様々な対策を行えるようになっている。マネージャーカードの他には乗っ取りやスパイといった妨害を行うもの、妨害を防ぐリスクヘッジのためのカード、その他にも商品開発や増資などが用意されている。全部で7ターンあり、ターンごとにイベントが発生し、火災による店舗焼失や人口増による売り上げ増等、様々なイベントが用意される。自社に影響があるカードが出る度に各歓声があがり、大いに盛り上がった。

多摩大学ではこのような学生主体のイベントが数多く企画・開催されている。“気付き”を得ることによって「自ら考え、実行する」学生が着実に育っていることの証であり、これからもっと増えていくことを期待したい。

コンビニの経営戦略を練る参加者

『朝日新聞』夕刊 2007年1月16日 朝日新聞社発行

Let's

就職力

多摩大

中川ゼミ（東京都）

経営学べるゲームを企画

多摩大経営情報学部の中川ゼミが活動の集大成として企画した「コンビニ経営ゲーム」の決勝大会が昨年12月中旬、東京都多摩市のキャンパスで開かれた。全学から参加者を募り、予選を勝ち抜いた6チームが出場した。

ゲームの主戦場は、50に及ぶ出店エリアだ。チームごとに戦略を練り、出店、増資、買収、ヘッドハンティングなどの用語が書かれたカードを実行委員会に提出し、出店競争を繰り広げる。

出店数が増えると維持コストが下がるスケールメリットを体感できる。損害保険に加入することでリスクヘッジできるようにするなど、経営学に基づくルールを多く盛り込んでいる。

途中、火災や強盗といった予測不可能な出来事が起こる仕掛けもある。それらを乗り越えて最終的に、多くのエリアを支配し、収益力を上げ、企業価値を最も高めたチームが優勝だ。

ゼミの学生たちが、このゲームを企画しようと思い立ったのは、教科書で経営学を学ぶだけでなく、体験から楽しく学ぶ方が身につくと考えたからだ。

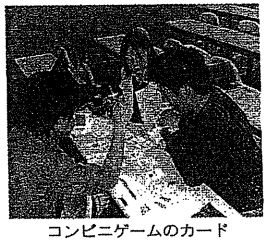
当初はゼミ内の活動として、表計算ソフトを使ってゲームを続けてきた。ゼミ生同士がゼミ外の時間も集まって議論をしたほか、インターネットの掲示板などを使って、ゲーム内容を吟味し、改良を加えてきた。ゲームの完成度が高まるにつれて、他の学生にも知ってもらおうという声が高まり、今回のゲーム大会の開催が決まった。

ゼミ長を務める4年の相原由隆さん(24)は「『企業の価値が高まるとはどういうことか』を考えられる内容になっています」。

指導する中川理・非常勤講師は大手シンクタンクの研究員でもある。ゼミでは、お茶やシャンプーといった旬な商品に関する課題を与えてマーケティング手法を学ぶとともに、学生からの提案や意見を重視してきたという。

「現実の社会では、課題は与えられない。学生自身が問題を発見し、解決できる力を身につけることが大切だと思います」

（松浦祐子）



コンビニゲームのカードを囲み、出店戦略を練る参加者ら＝多摩大で

「自らの気づき」を重視

1989年に開学した。現在は、経営情報学部の1学部のみ。キャンパスは東京都多摩市にある。学生数は約1400人。01年から、経済学者の中谷巌氏が学長に就任した。07年4月、神奈川県藤沢市にグローバルスタディーズ学部を開設する予定だ。

「自らの気づき」を重視し、1年次には、中谷学長自らが学生とともに考える講義を担当するほか、学期末には「私たちの自己発見」というテーマでプレゼンテーションをする。

07年3月卒業予定者の主な内定先は次の通り。大和ハウス工業、日本精工、オムロン、マツダ、伊勢丹、三井住友銀行、りそなホールディングス、日本生命、ヤフー、楽天など。

出原ゼミ「プロジェクトK」NHK大学ロボコン第1次選考を通過

多摩大学「プロジェクトK」チームがNHK大学ロボコン2007の第一次選考を見事通過した。多摩大学は2002年のNHK大学ロボコンにも出場し、決勝戦では特別賞を受賞している。今回のチームは出原ゼミナールのゼミ生が中心となっている。

今回のロボコン出場の発起人で代表の木村彩乃さん（経営情報学科2年生）は出場のきっかけについて「小さい頃からロボコンに興味がありました。多摩大学が以前ロボコンに出場していることは知っていました。2年生になって出原ゼミに入り、是非出場したいと出原先生にお話ししたらすぐにメンバーを集めてスタートしました。全てが新しい発見でとても楽しいです。」と話す。現在は2次ビデオ審査のために実際のロボットを作成している。春休みに入って日曜日を除くほぼ毎日メンバーと共にゼミ室に集まり、出原先生と一緒にロボット製作に没頭している。

戦略上の理由からロボットの特徴や詳細は公開できないとのことだが、「DRACOS」(Dynamic Reactions of Adaptive, Conditional, and Optimized Strategy)というオリジナルのシステムを構築し、「ハードウェア勝負を挑む相手」に対して「ソフトウェア勝負に持ち込み勝利する」というアプローチで対戦相手を撃破するという。

出原ゼミは毎年IVRCというバーチャルリアリティのコンテストでも毎年高い評価を受けている。2003年にはフランスのラバルバーチャルにも出展するなど多方面からも注目を浴びている。理系大学が名を連ねるコンテストやロボコンに文系大学である多摩大学が何故高い評価を受けているのか。それは“ゼミ中心大学”だからである。学生がやりたいという“想い”を先生が徹底的にサポートする。そんな姿が大学のあちこちで見られるからこそ様々なアイデアや技術が生まれてくるのだろう。

4月のビデオ審査に通過すると次は6月の決勝戦である。今後も出原ゼミの「プロジェクトK」の活動に注目したい。

製作を行う木村さん（中央）出原先生（手前）

2007 FEBRUARY